



TITLE:

わが図書館の思い出

AUTHOR(S):

足利, 惇氏

CITATION:

足利, 惇氏. わが図書館の思い出. 静脩 1965, 1(4): 1-1

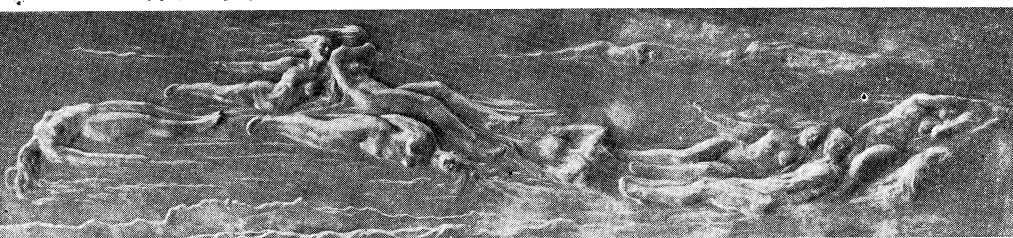
ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36243>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1965年 3月

Vol. 1, No. 4

わが図書館の思い出

足 利 惇 氏

図書館にはわが学生時代を通じてまたその以後にもずいぶん厄介になったものであるが、その間今日でも鮮やかに眼底に残っている印象も二、三にとどまらない。大正の始めごろ、私の中学時代の東京の名だたる図書館といえば、まず日比谷の南葵（なんき）文庫や番町の大橋図書館などを数えることができるが、なかでもよく通った思い出の多いのは上野の国立図書館であった。このころよく見受けられるように、入館する学生たちが図書館の入口の前に長蛇の列をつくり長い時間露天に順番を待つ必要もなく、閲覧人の数もまばらで、薄暗い階下の下足場で、すのこの上でじめじめしめった備えつけの草履にはきかえて、冷たい石の階段を登り閲覧室へ入るのが常であった。現在、北海道大学の触媒研究所長の堀内寿郎君とは常連で、夕方になると館外に張り出した喫茶室で、暖かい牛乳と焼きたてのトーストパンとですますことが多かった。帰りは人気の少ない上野公園の茂みを青白いガス燈をたよりに抜けて帰ったが、今思い出しても懐しい限りである。

今から30年前の外遊のとき、パリ大学の高等研究所の図書室にもよく出入したが、閲覧室はたいして広くもなく、室の四方には金網を張り、鍵のかけてある書棚がならんでいる。稀観本か重要な書物ばかりなどであろう。もし所用の本が見たければ掛員にいちいち錠をはずしてもらわなければならない。出してもらった書物は室外に持ち出すことを許されず、粗末なテーブルの上に広げて見るわけであるが、ある時同じテーブルの私の向う側に年は27、8位と思われる妙齢の夫人が鉛筆で字を追うて読みふけているのが眼に入った。何語の書物かとこちらで盗み見るとそれは楔形文字のテキストであった。それにはちょっと度胆を抜かれたが、鉛筆で追う早さから見て相当の学力ある学生（？）と察せられ大いに敬意を表したわけであった。この頃でこそわが国にも楔形文書研究の学者や学生も少しづつその数を増してはいるが、30年以前の当時ではわが国の学問の進歩はまだまだであると痛感したものであった。

国民図書館（ビブリオテーク・ナショナル）のブロッシェ氏に会ったのもその当時のことである。氏はトルコ・ペルシア・アラビアのいわゆる近東文書に精通し、その語学文学の造詣の深いことは世界的学者として有名であるが、図書館における彼は少しも風采をかまわず、後進の私に対して手をとらんばかりの親切を示された。パリ大学のサンスクリット講座の創始者シェジィ氏も、実は彼と同じような図書館の一館員に過ぎなかった。図書館がたんに図書の蒐集所ばかりではなく、同時に立派な学者の育成所でありブールの場となり得ることは、あるいはわが国では機構の上からむつかしいことかも知れないが、もし可能であるならば、わが国の学問を一層自由に発展させる一大殿堂となることを確信する。

（文学部教授）